

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22320002

研究課題名（和文） 「農」の哲学の構築—学際的な拡がりの中で

研究課題名（英文） Construction of “Agricultural” Philosophy: in the Trans-disciplinary Perspectives

研究代表者

鬼頭 秀一 (KITOH SHUICHI)

東京大学・大学院新領域創成科学研究科・教授

研究者番号：40169892

研究成果の概要（和文）：

福島第一原発事故を原因とする放射性物質の汚染は、「農」の本質的な破壊をもたらした。特に、有機農家にとっては、生産者と消費者との関係の変化を見直しを迫られ、生産者と消費者における「農」の違いというものを照射することとなった。「農」の問題は人が生きるということと密接に関連しており、単なる食料生産に限定されない。放射線被曝下における植物工場は、純粋な形の食糧生産システムとしての「農」の象徴である。このことは、対極となる倫理的実践としての農ということがあぶり出されてくる。「すまう」「土地に根ざす」ということに重要な本質がある。「農」は、生命倫理と環境倫理の統合という枠組みの中にとらえることが出来、well-being 他者とともすまうということにも関連している。3.11 以後の復興において、「農」の営みが再考されている。遊び仕事も含めた非貨幣的な経済の存在の重要性が明らかになった。福島における、「農」の「被害」もより広範な営みとして捕らえる視点が必要であり、「農」の本質がここにあることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：

The radioactive contamination originating in the Fukushima Daiichi nuclear power plant accident brought about agricultural fundamental destruction. It was pressed for reexamination of the relation between a producer and consumers especially for the organic farmer. Agriculture is closely related to ‘life’ in total, and is not limited to mere production of food. A plant factory is a symbol of the agriculture as a production-of-food system in that sense. The agriculture as ethical practice is in the opposite poles. It is important to inhabit or to dwell in the land. Agriculture is also integration of bioethics and environmental ethics. Agricultural subsistence is reconsidered after 3.11. It became clear that the importance of the non-money economy including minor subsistence. It is important to regard agriculture as more extensive perspectives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2011 年度	5,500,000	1,650,000	7,150,000
2012 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
総計	13,300,000	3,990,000	17,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：「農」、有機農業、福島原発事故、低線量被曝、農生態系、非貨幣的経済、環境倫理、生命倫理

1. 研究開始当初の背景

21世紀になって、不確実性を前提とし、徹底的に管理しない形で人間が自然とうまく折り合えるようなあり方を模索することが必要になってきた。「農」の営みは、自然を徹底的に支配する形ではなく、自然との相互関係の中で動的に捉えられるべきものであり、それは、まさに、人間の自然に対する働きかけのあり方について見直していく重要な場でもあった。「農」の営みに注目することは、現在の農業生産のあり方を問いただすだけでなく、そもそも、人間の自然との関係のあり方の根本的なあり方にもつながる問題である。「農」の営みは自然的、社会的、精神的な領域まで広がっており、そのために、「農」という事象は、環境問題における、さまざまな問題が交差している、重要な結節点となっている。

今まで「農」に関する哲学・倫理的考察は限定された形でしか論じられてこなかった。「農」そのものの営みに関する哲学・倫理的な関心は低いままであった。欧米では「農業環境倫理学」という領域があり、1988年以來、ジャーナルまで出して今日まで続いているものの、その内容は、農業技術に関する倫理学と人間以外の動物との関係にかかわる、生命倫理学、環境倫理学の領域の議論に限定されてきた。このような中で、「農」の営みの哲学的再評価がますます必要になってきている。

2. 研究の目的

人間の自然に対する働きかけのひとつのあり方として、「農」という営みに注目し、それを社会的・精神的・環境的文脈の中に位置づけ、そのあり方を「農」の哲学として構築する。そのために、哲学、倫理学のみならず、思想史、社会学、生態学、有機農業学なども含めた学際的な観点から検討する。新たな「農」のあり方については、「農」の技術論的な問題から、それが営まれる「農村」の社会的なあり方、その営みの場である「農地」の生態系の生物多様性保全に至るまでの幅広い視野から、それらが密接に絡み合い、動的に関連しているその全体に位置づけ、展望したい。これは、あるべき「農」の理念にかかわる研究であり、「農」の倫理学の試みでもある。それらを含めた「農」の哲学を構築し、そのことの人類の将来にわたる意味も展望する。

そのために、「農」の営みが持つ多様な側面に注目し、そのような多様な視点から統合的に捉えられる「農」のあり方の理念について考察を行い、そこから「農」の哲学を構築したい。

「農」の哲学は、それ自体で自足的に存立するのではなく、固定的な形でスタティック

にある形を持ったものとしてあるものではなく、絶えず揺れ動き、さまざまな文脈の社会的、政治的なあり方の中でダイナミックに動いているが、しかも、そこに何らかの普遍性があるものとして提示されるのではないだろうか。そのような構造的なあり方に関しても明らかにしていきたい。

3. 研究の方法

本研究では、農業、食、環境にかかわる哲学・倫理学を専門とする研究者に加えて、農村にかかわる社会学者、農地の自然的特質のみならず、農村における人間の精神的なかわりとの関係にも深い洞察をしている農生態学者なども含め、「農」の基本的な領域である、農村社会、農地、「農」にかかわる技術的、自然的、社会的精神的なかわりにかかわる領域をも対象として含めた。有機農業も、現在では、安全性に限定することなく、農生態系との関係、農作業における社会的、精神的なあり方のサポート、消費者や一般市民とのかかわりといった観点から、歴史的に問いただされており、そのことは、「農」の営みの全体としてのあり方について、有機農業がモデル的な形を提示しているともいえる。そのため、有機農業を哲学的に考察することが重要なステップになる。

一方、平成23年3月11日の東日本大震災とそれに伴う福島原発事故は、「農」という営みの根本に大きな問題提起をしたと言える。地震と津波の自然災害に関しては、今まで多くの自然災害の中で「農」という営みを維持してきたあり方が問われており、江戸期の篤農家の思想と実践は今改めて注目する必要がある。一方、福島原発事故という大規模な放射性物質汚染を引き起こした大惨事は、大地で耕し続けることの意味、生産者と消費者の流通の問題、大地から切り離された野菜工場の検討など、これからの「農」のあり方の根本が問われることとなった。

そのため、当初の有機農業のあり方、農生態系の生物多様性の意味などの検討から始まり、福島原発事故に伴う問題を重点的に調査を行うこととなった。そのことにより、「農」のあり方に関してより深化した考察をしていくこととなった。

4. 研究成果

福島第一原発事故を原因とする放射性物質の汚染は、福島県の農業地域や阿武隈山系の山林や中山間地区を中心に、「農」の基本である地に足を付けて生きることの営みそのものを破壊し、「農」というものを根本的に問いたださざるを得ない状況に至っている。その「農」の被害は、狭い意味での産業としての「農」に留まらず、マイナーサブシンスも含めた生活全般に至っている。ま

さに「農」ということが何であるのかということ逆照射することともなった。原発被害に伴う避難者調査、二本松市東和町を中心とした、福島周辺の有機農家、阿武隈山系でのマイナーサブシンスンスなどの人の営み、放射能汚染以後の消費者との関係と、福島の復興計画に登場するほどの注目を集めている野菜工場の哲学的考察も行った。放射性物質の中濃度汚染地域で、避難するかそこに留まって「農」を続けるかという選択は「農」の本質にかかわる問題であり、福島原発事故以後の生産者と消費者との関係の変化は、生産者と消費者における有機農産物の意味の違いを照射することとなった。

議論し解明されたことは、まだ時間の中で流動的な状況であるが、その時々考察の重要性を考え、『研究成果報告』をwebで適宜公開すると同時に、2012年9月には中間報告書であるエッセイ集をwebで公開した。また、今までの研究の成果をまとめて最終報告書を作成して出版する予定で検討を重ね、現在、報告書として印刷中である。

研究成果のいくつかの論点を提示する。

まず、「農」の問題は人が生きるということ密接に関連しており、単なる食料生産に限定されない。逆に、放射線被曝下において、植物工場が構想されることは、問題を純粋な形の食糧生産システムとしての「農」をとらえていることになり、対極となる倫理的実践としての農ということがあぶり出されてくる。「すまう」「土地に根ざす」ということに重要な本質がある。また、「農」は、生命倫理と環境倫理の統合という枠組みの中にとらえることが出来、well-being 他者とともにすまうということにも関連している。その意味で福祉という枠組みとの関連がある。

3.11の復興の問題において、拠点開発的な産業復興が主体となり、人の視点、コミュニティの視点からの全体の枠組みが構想されていないこととも関連がある。特に東北の被災地においては、「農」ということも、遊び仕事も含めた形でより広くとらえる必要があり、非貨幣的な経済の存在が重要である。福島における、「農」の「被害」の実態もそこにある。「除染」などによって農作物に放射性物質を移行させないような試みがなされているが、「農」の営みが、単に出荷する農作物が安全であればいいということではなく、わらの利用も含めたより広範な営みとして捕らえる視点が必要である。現在を捉える哲学の根本的な問題の本質がまさにここにあることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計26件)

1. 榊湯俊子, 改めて地域自給を考える, 井口隆史・榊湯俊子編『地域自給とネットワーク』コモンズ, 2013, 印刷中掲載確定, 査読有。
2. 佐治靖, 被災地における祭礼・神事芸能と復興—福島県の状況, 『季刊 悠久』第二次130号, 2013, 111-127, 査読有。
3. 鬼頭秀一, 福島原発由来の低線量被曝問題にかかわる科学者の倫理, FGF+TGF(編)『原発災害とアカ デミズム』(合同出版), 2013, 80-104, 査読有。
4. 森岡正博, まるごと成長しまるごと死んでいく自然の権利, 栗屋 剛・金森 修 編集『生命倫理のフロンティア』丸善, 第20巻, 2013, 97-114, 査読有。
5. 富田涼都, なぜ順応的管理はうまくいかないのか—自然再生事業における 順応的管理の「失敗」から考える, 宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』(新泉社), 2013, 30-47, 査読有。
6. 関礼子, 自然順応的な村の資源保全と『伝統』の位相—福島県檜枝岐村のサンショウウオ漁と人びとの暮らし, 宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社, 2013, 148-171, 査読有。
7. 丸山康司, 持続可能性と順応的ガバナンス, 宮内泰介編『なぜ環境保全はうまくいかないのか—現場から考える「順応的ガバナンス」の可能性』新泉社, 2013, 295-317, 査読有。
8. 榊湯俊子, 有機農業の『産業化』と『ローカル』への覚醒, 淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要, 2013, 1-16, 査読無。
9. 鬼頭秀一, 民俗学における学問の「制度化」とは何か——自然科学の「制度化」のなかから考える, 岩本通弥・菅豊・中村淳(編)『民俗学の可能性を拓く——「野の学問」とアカデミズム』(青弓社), 2012, 240-264, 査読有。
10. 関礼子, 流域の『自治』をデザインする—“絆”をつなぐフィールドミュージアムの来歴, 桑子敏雄・千代章一郎編『感性のフィールドワーク』東信堂, 2012, 67-87, 査読有。
11. 日鷹一雅・大塚泰介, 特集「水田生物群集」にあたって, 日本生態学会誌, 62巻, 2012, 155-156, 査読有。
12. 日鷹一雅, (2012) ギルド構造から垣間見た水田群集の実際的な食物網と潜在的な食物網, 日本生態学会誌, 62巻, 2012, 187-197, 査読有。
13. 本巢芽美・丸山康司・飯田誠・荒川忠一, 風力発電の社会的受容, 環境社会学会研究,

- 18 卷, 2012, 190-198, 査読有。
14. 鬼頭秀一「二〇世紀型技術の終焉と新しい時代の環境の倫理」『歴史としての 3.11』(河出書房新社編集部編), 2012, 128-140, 査読有。
15. 佐治史・佐治靖, 野菜がつなぐ震災下の人-人関係—青物小売り・教会・震災・原発避難者をめぐって(中間報告), 『「農」の哲学の構築 研究成果報告』第 2 号, 2011 年, 1-30, 査読無。
16. 関礼子・鬼頭秀一, 福島原発事故による避難者受け入れと「ボランティア」—福島県檜枝岐村と群馬県片品村の事例から, 『「農」の哲学の構築 研究成果報告』第 1 号, 2011 年, 1-41, 査読無。
17. 鬼頭秀一「環境政策を環境倫理から捉える視座 — ドイツの環境政策と環境思想の狭間」『ドイツ研究』45 号, 2011, 54-68, 査読有。
18. Masahiro Morioka "Natural Right to Grow and Die in the Form of Wholeness" *Diogenes*, Vol. 57, No. 3 (2011):103-116, 査読有。
19. 丸山康司・本巢芽美, 風力発電の社会受容性—科学コミュニケーションの限界を踏まえた方策, 年報科学・技術・社会, 20 卷, 2011, 37-55, 査読有。
20. 桐原健真「第三の開国」とはなにか? : 戦後日本における自他認識の転回 (1945~1980) 『文化』74(3), 2011, 1-20, 査読有。
21. 日鷹一雅, 農生態学からみた農山漁村の生物多様性の評価と管理. (日本農学会編) シリーズ 21 世紀の農学, 農林水産業を支える生物多様性の評価と課題 (養賢堂), 2011, 17-40, 査読有。
22. 森岡正博, 生命の哲学, 戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』2011, 198-208, 査読有。
23. 榎湯俊子, 農業と食料, 船橋晴俊編『環境社会学』, 2011, 111-129, 査読有。
24. 榎湯俊子, 愛媛県今治市における地産地消の展開と有機農業—自治体行政における環境倫理の形成に着目して, 淑徳大学総合福祉学部・コミュニティ政策学部紀要, 第 40 号, 2011, 177-203, 査読無。
25. 桐原健真, 「情報の海」を越えて—吉田稔陰の情報との向き合い方に学ぶ, 人間会議, 2011 年夏号, 56~61, 査読無。
26. 日鷹一雅, 農生態学からみた農山漁村の生物多様性の評価と管理, シリーズ 21 世紀の農学, 農林水産業を支える生物多様性の評価と課題 (日本農学会編), 2011, 17~40, 査読有。

[学会発表] (計 35 件)

1. 村上裕 (愛媛県中予地方局)・日鷹一雅,

農村都市混在地域におけるスクミリンゴイを中心とした外来種認知度調査—中学生を対象としたアンケート調査から, 農村計画学会 2013 年度春期大会学術研究発表 (ポスターセッション), 東京都・東京大学, 2013 年 04 月 06 日。

2. 鬼頭秀一, 原発災害とリスクコミュニケーション, 飯館村放射能エコロジー研究会・東京シンポジウム (招待講演), 東京都・東大農学部弥生講堂一条ホール, 2013 年 03 月 30 日。

3. 鬼頭秀一, リスクコミュニケーションと専門家の役割, 飯館から福島と日本を考える—復興支援に関する医学と人文社会学からのアプローチ (招待講演), 福島市・福島テルサ, 2013 年 03 月 23 日。

4. 富田涼都, 在来作物を巡る人と自然: その保全と課題, 日本生態学会第 60 回大会, 静岡市・グランシップ静岡, 2013 年 03 月 07 日。

5. 日鷹一雅, 農業・農村の多様性は生物多様性に貢献するか?, 第 60 回日本生態学会静岡大会, 静岡市・グランシップ静岡, 2013 年 03 月 07 日。

6. 日鷹一雅, 新たな理論的枠組み「総合的外来種駆除」に向けて, 第 60 回日本生態学会静岡大会, 静岡市・グランシップ静岡, 2013 年 03 月 06 日。

7. 丸山康司, 市民参加型地域調査の必要性和可能性, 滋賀大学環境総合研究センター第 9 回年次シンポジウム, 彦根市・コラボしが 21, 2013 年 03 月 02 日。

8. 日鷹一雅, 「アレロパシーを利用した有機農業、特にヘアリーベッチとハシショウマメの今後の利用について」「有機農業現場における新技術利用の可能性—農業現場と研究機関のコラボレーション」, 第 13 回日本有機農業学会 (東京) 大会・総会, 東京都・東京大学, 2012 年 12 月 08 日。

9. 鬼頭秀一, 中立的な立場を取ろうとする専門家がリスクコミュニケーションに失敗するのはどうしてか—政策論的立場からの脱却の必要性和地を這う視点の獲得の必要性, 科学技術社会論学会第 10 回年次大会 (招待講演), 葉山町・総合研究大学院大学, 2012 年 11 月 17 日。

10. 富田涼都, 自然再生事業を巡る多様な価値と環境ガバナンス, 野生生物保護学会第 18 回大会, 宇都宮市・宇都宮大学峠キャンパス 2012 年 11 月 17 日。

11. Yasushi Maruyama, Activities of Local Society toward Community Power, 1th World Wind Energy Conference 2012, Bonn, Germany, 2012 年 07 月 06 日。

12. Yasushi Maruyama, Makoto Nishikido, Social acceptance of Wind Energy and Social Experiment of Community Power in Japan, 1th World Wind Energy Conference

2012, Bonn, Germany, 2012年07月06日。

13. 城戸誠 丸山康司 柏谷至 藤公晴, ポスト開発主義としての再生可能エネルギー事業の環境社会学, 環境社会学会第45回大会, 秋田県大潟村・サンルーラル大潟, 2012年06月03日。

14. 鬼頭秀一, 3.11以後の地域づくりの課題—自然との包括的な関係を築くために, 第3回千曲川・信濃川復権の会総会(招待講演), 新潟県津南町・津南文化センター大ホール, 2012年05月26日。

15. 鬼頭秀一, 震災以降の環境倫理と環境経営の課題—3.11以後の社会と技術を捉える枠組みの転換の中で—, 環境経営学会第12回大会(招待講演), 東京都・跡見学園女子大学, 2012年05月19日。

16. 桐原健真「開国」言説と戦後日本」、仙台近現代史研究会、仙台市・東北大学文学研究科, 2012年03月24日。

17. 日鷹一雅, 序:なぜ今、里山の在来知? 暮らしの中に潜む「内なる生物多様性」, 第59回日本生態学会 企画集会 T18「里山における在来知と生物多様性管理」, 滋賀県大津市 龍谷大学, 2012年3月20日。

18. 嶺田拓也・金尾滋史・中井克樹・松田征也・高倉猛・林和典・日鷹一雅, スクミリンゴガイの琵琶湖およびその集水域における侵入・定着, 第59回日本生態学会、滋賀県大津市 龍谷大学, 2012年3月19日。

19. 富田涼都「環境倫理学から見た滋賀県水田地帯の環境保全政策の位置づけ—『誰が』生態系サービスを楽しむのか?」日本生態学会、龍谷大学瀬田キャンパス、2012年3月18日。

20. 鬼頭秀一, 「原発事故と生命環境倫理学—「水俣」との比較の中で—」, 公共哲学シンポジウム「震災・原発問題と公共研究」TKP 渋谷カンファレンスセンター, 2012年3月3日。

21. 桐原健真「永久開国論と戦後日本:「尊農攘夷」思想を出発点に」、政治学勉強会、仙台市・東北大学法学研究科, 2012年01月26日。

22. Masahiro Morioka, Criticism of Moral Bioenhancement: Commentary on Julian Savulescu, 招待講演, Fourth GABEX International Conference, 東京大学本郷, 2012年1月7日。

23. Masahiro Morioka, Foundation of Ethics in the Age of Technology, 2011 Annual Conference, VSJF - German Association for Social Science Research on Japan, 招待講演, Heinrich-Pesch-Haus, Ludwigshafen, Germany, 2011年11月27日。

24. Masahiro Morioka, Some Preliminary Remarks on Human Dignity and the Manipulation of the Sense of Happiness, 2011 Carnegie-Uehiro-Oxford Conference on

“Shaping Moral psychology” 招待講演, Carnegie Council, NY, USA 2011年11月8日。

25. 鬼頭秀一, 「ポスト 3.11 の生命環境倫理—福島第一原発事故を踏まえてその構造的な枠組みを問う—」(招待講演), 第30回日本医学哲学・倫理学会大会基調講演, 東京大学 文学部, 2011年11月5日。

26. 鬼頭秀一, 「放射線被曝の時代に生きる」, 第75回上智哲学会公開シンポジウム「共に生きる智の探求」(招待講演), 上智大学, 2011年10月30日。

27. 桐原健真「護法・護国・夷狄」、日本思想史学会 2011年度学術大会パネルセッション「幕末維新期の護法思想・再考」、豊島区・学習院大学, 2011年10月30日。

28. 森岡正博, 「誕生」概念と「誕生肯定」概念の哲学的考察, 応用哲学会第3回大会, 京都大学, 2011年9月25日。

29. 鬼頭秀一, 「低線量被曝問題における「科学者」の対応の構造的な問題と「科学者」の信頼回復の道筋」, 日本学術会議哲学委員会シンポジウム「原発災害をめぐる科学者の社会的責任—科学と科学を超えるもの」(招待講演), 東京大学文学部, 2011年9月18日。

30. 富田涼都「生態系サービスによる『人と自然のかかわり』評価の可能性と課題」日本環境ジャーナリストの会「生態系サービスをどう報道するか」第三回セミナー、地球・人間環境フォーラム会議室(東京)、2011年8月22日。

31. 鬼頭秀一, 原発と環境教育, 環境教育学会, 青森大学(青森県), 2011年7月17日。

32. 丸山康司 西城戸誠 柏谷至 藤公晴, 2011, 「再生可能エネルギーと内発型発展」環境社会学会第43回大会(関東学院大学) 2011年6月4日。

33. 富田涼都「順応的管理における自然の『リスク』は受け容れられるのか?—自然再生事業を例に」『野生動物管理システムフォーラム「自然再生と野生動物管理」』、東京農工大学府中キャンパス、2011年5月27日。

34. 鬼頭秀一, ポスト 3.11 の環境倫理の課題, 環境倫理学・環境哲学 3.11 緊急集会、神田・学士会館(東京都), 2011年5月5日。

35. 鬼頭秀一, 「リオ以後の環境倫理の課題—3.11 を捉える視座」, 地球システム・倫理学会研究会(招待講演), 東京 麗澤大学東京本部, 2011年4月29日。

〔図書〕(計2件)

1. 鬼頭秀一(編)『「農」の哲学—その学際的な拡がりのなかで』(科研費基盤研究(B)報告書、東京大学鬼頭研究室)、2013、印刷中。

2. 鬼頭秀一(編)『「農」の哲学—その学際的な拡がりのなかで 研究成果報告 エッセイ集』(東京大学鬼頭研究室)2012年、46頁。

[その他]

ホームページ等

<http://kitosh.k.u-tokyo.ac.jp/agri>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鬼頭 秀一 (KITOH SHUICHI)
東京大学・大学院新領域創成科学研究科・
教授
研究者番号：40169892

(2) 研究分担者

竹之内 裕文 (TAKINOUCHI HIOFUMI)
静岡大学・創造科学技術大学院・教授
研究者番号：90374876

森岡 正博 (MORTOKA MASAHIRO)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：80192780

白水 士郎 (SHIROUZU SHIROU)
近畿大学・文芸学部・准教授
研究者番号：10319759

(H22のみ)

福永 真弓 (FUKUNAGA MAYUMI)
大阪府立大学・現代システム学域・
准教授

研究者番号：70509207
(H22-H23まで)

榊瀉 俊子 (MASUKATA TOSHIKO)
淑徳大学・総合福祉研究科・コミュニティ
政策学部・教授
研究者番号：00255150

澤登 早苗 (SAWANOBIRI SANAE)
恵泉女学園大学・人間社会学部・教授
研究者番号：20318877

丸山 康司 (MARUYAMA YASUSHI)
名古屋大学・環境学研究科・准教授
研究者番号：20316334

日鷹 一雅 (HITAKA KAZUMASA)
愛媛大学・農学部・准教授
研究者番号：00222240

富田 涼都 (TOMITA RYOTO)
静岡大学・農学部・助教
研究者番号：20568274

桐原 健真 (KIEIHARA KENSHIN)
東北大学・文学研究科・助教
研究者番号：70396414

篠田 真理子 (SHINODA MARIKO)
恵泉女学園大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：80409812

(H22-H23まで)

(3) 連携研究者

関 礼子 (SEKI REIKO)

立教大学・社会学部・教授

研究者番号：80301018

石原 明子 (ISHIHARA AKIKO)

熊本大学・社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：50535739

(4) 研究協力者

佐治 靖 (SAJI OSAMU)

福島県立博物館学芸員

折戸 えとな (ORITO ETONA)

東京大学・大学院新領域創成科学研究科・
博士課程・大学院生

岩佐 礼子 (IWASA REIKO)

東京大学・大学院新領域創成科学研究科・
博士課程・大学院生